

〔日本釋名中形體〕意コ、ロ、バ、セ心の端也ハシしとせと通ず、古人曰、意者心之所發也、是心のはじめてをこるはし也、

〔倭訓栞前編九〕古コ、ろばせ 意を訓せり、東鑑に心端と書り、日本紀に景迹を訓せり、また心操をもよめり、

〔日本書紀二十九〕天武天武十一年八月癸未、詔曰、凡諸應考選者能檢其族姓及景迹コ、ロ、バ、セ、方後考之、若雖景迹行能灼然、其族姓不定者、不在考選之色、

〔令義解四〕考課考課凡官人景迹功過應附考者謂中略景迹者景像也、猶言狀迹也、皆須實錄、略略、

〔吾妻鏡七〕文治三年三月廿一日癸亥、佐竹藏人年來雖列二品門客、心操聊不調度、々々現奇怪之間、今朝蒙御氣色、略略、下

〔吾妻鏡十二〕建久三年五月廿六日丁酉、若公源賴家幼稚之意端、插仁惠優美之由、有御感被獻御劔於金剛公、是年來御所持物云云、

〔運歩色葉集古〕心緒心緒、

〔倭訓栞前編九〕古古、ろばえ 日本紀に意字、また意氣、立操、心許などをよめり、心映の義なるべし、

〔類聚名物考心情二〕古古、ろばえ 心榮

心ばせに似たれども、その意異なり、心つきといふも似たり、心よせといふに似たる所も有り、

〔日本書紀二十四〕皇極皇極三年、輕皇子孝深識中臣鎌子連之意氣コ、ロ、バ、セ、高逸、容止難犯、乃使寵、

〔源氏物語紅葉賀七〕おさなき人は、みつゝい給ふまゝに、いとよき心心、まかたちにて、なに心もなくむつれまとはしきこえ給、

〔和泉式部集五〕またあるやうある人に奉るとて

心ねのほどを見するぞあやめぐさ草のゆかりにひきかけねども